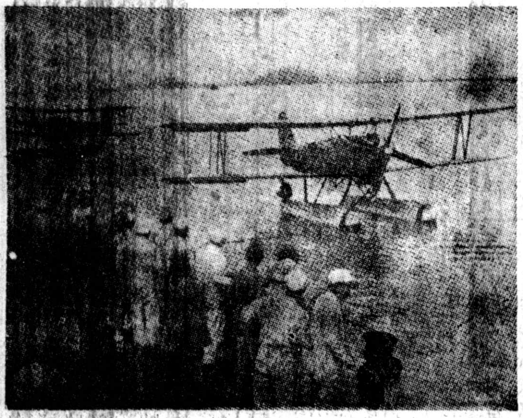
日伯コドモ新聞

日伯新聞附錄
伯國聖市マエストロ
カルデン街一一〇九
（ヴエルゲイロ二二五八）
發行所　日伯新聞社
【毎週一回發行】

忠勇美談

樂い正月も他所に 原隊尋ねて三千キロ

四十三勇士再び戰線へ



去年の十二月なかば頃でした、〇〇からどやどやと門司行の汽船に乘つた四十三人の兵隊さんがありました、船が靜かに動き出しますと

「こんな船に乘つて、きつと原隊には還れないぞ、殘念だ殘念だ。」

と、一人の兵隊さんはいきなり飛び出しました。するとほかの兵隊さんが

「しかし一旦內地から出直さなければ、上海へ行く船がないぢやないか。」

と、その兵隊さんをなだめます。けれどもその兵隊さんは

「だけど、だけど、戰友達は〇〇を攻撃してゐるんだ、俺たちだけが……。」

あとは言葉もなく、肩をふるはせて、口惜し泪にむせぶのでした。この兵隊さん達は、どの方も敵の彈丸や、敵の砲彈のかけらを受けて、名譽の負傷をし、一ケ月か二ケ月、野戰病院で暮してやつと直り

「この上は一日も早く原隊に歸るんだ。」と、勇みたつてゐる兵隊さん達ばかりなのですかうした兵隊さんを乘せた船は、十二月十日の午後三時に門司に入港しました。久し振りで見る懷しい福岡の山々しかしあと半月でお正月なのです。どんなにその兵隊さん達は、せめて半日でもとお正月を祖國で迎へたかつたでせう。しかし兵隊さん達が先づさがしたのは上海行の船でした。そこを通りかゝつたランチを呼びとめて、すぐ出帆しかけてゐた上海行の船に乘り移りました。船から船へ、水から水へ、その日の午後八時には、もう日本をあとに一路上海て向つてゐたのです。

上海についた四十三人の兵隊さん達は、それこそ氣狂ひのやうになつて、自分達の隊を追ひかけました。ある時は船で、ある時はトラツケで、またある時は軍用列車に飛び乘つて、あつちの部隊、こつちの部隊と、行先をきゝながら、原隊を尋ね尋ねて三千キロやつと〇〇につきました。

その時の四十三人の兵隊さんのうれしさうな顔！

「お友達にも會へる。愛馬にも會へるんだ。」

胸一杯、喜びにふるへながら、それ〴〵の隊へ急ぐその四十三人の兵隊さんの靴音は高く、足取も輕くはづんでゐました。（寫眞我が海の荒鷲）

新年

年のはじめの
ためしとて
終りなき世の
めでたさを
松竹たてゝ
門ごとに
祝ふけふこそ
たのしけれ

初日の光り
さしいでゝ
四方に輝く
今朝のそら
君がみかげに
たぐひつゝ
祝ふけふこそ
めでたけれ

支那の主な都會は これでみな占領だ

攻略地域は日本全土の二倍餘

漢口が陷落してからてうど六十七日目です。支那には天津、北京、青島、上海、南京漢口、廣東、重慶と大きな都會が八つありますが、そのうち七つまで日本軍が占領し、今では八つのうち一ばん小さく、一ばん奧地にあつて、不便な重慶が殘つてゐるだけです。一昨年七月七日蘆溝橋で事件が勃發してからてうど一年と百七十八日目で、戰線ではお正月を二回も迎へるわけです。次に七つの都會の占領と全面積を調べて見ませう

◎一昨年七月二十八日から三十日までの間に北京、天津地方◆九月三日香港沖の東沙島（プラタス島）◆十月十日河北省の石家莊◆同十七日蒙古の包頭◆同二十六日上海の大場鎭◆十一月五日杭州灣上陸◆同九日上海一圓◆同日山西省の太原◆十二月七日山東省の濟南◆同十日首都南京◆同廿五日浙江省の杭州◎昨年一月十日青島◆五月十日福建省の廈門◆五月十九日江蘇省の徐州◆七月二十六日江西省の九江◆十月十二日廣東省のバイアス灣上陸◆同二十一日廣東

日本の全面積は約六十七萬五千方キロですが支那事變で日本軍の占領した面積はその二倍あまりにのぼります。漢口から上海へは揚子江を約一千百キロ、北京へは京漢鐵道を約一千二百キロ、廣東へは粵漢鐵道約一千百キロです。日本軍の占領地域を扇子とすると漢口は丁度要にあたる大切なところです。

漢口へゆくのには

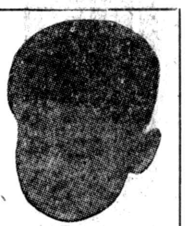
長崎から上海へ約八百五十キロを船で一晝夜、上海から漢口へは流れを遡るので船で五晝夜、漢口から上海への戾りは流れにのるので卅八時間です。釜山から北京へ二千六十八キロ、乘換なしの大陸特急にのれば三十九時間、北京、漢口間は戰前四十三時間でしたから、大阪、漢口間は百時間あまりです。

神戶、香港間は上海經由で海路約二千六十キロ、船で五日間ですが、門司からのれば四日間です。香港から渡船や廣九鐵道で廣東へでて、廣東から鐵道約四十時間で漢口につきます。このコースも近く日本から一枚の切符でゆけるやうになるでせう。大阪や名古屋や福岡から漢口行の飛行機が一日でとぶのも遠いことではないと思はれます。

頓智問答

暦と歳

秋田實



太郎「明けましてお目出たう。」

花子「お目出たう。あたしお雜煮をたべすぎて動けないの。いくらたべてもお腹が大きくならないといゝんだけど」

太郎「幾らくつてもちつともお腹が大きくならないものがあるんだけど知つてる？」

花子「そんなものないわ」

太郎「あるよ。お正月になるとどこのうちでも新しいのがあるよ」

花子「……」

太郎「そら、暦だよ。」

花子「こよみ?!」

太郎「暦を繰つてごらん、お腹が大きくなる？」

花子「まあ、ひどい、ぢやア幾らとつてもかまはないものが三つあるんだけれど知つてる？」

太郎「なんだらう」

花子「太郎さんだつて一つとつてるわ、わからない？歳よそれから角力それから寫眞」

太郎「アハハハ」

花子「オホホホ」

日本は外國の眞似をしてはだめだ！

わが無敵聯合艦隊の司令長官

吉田中將の少年時代

名將傳を愛讀して發憤

このたび吉田善吾中將閣下が我が無敵艦隊の司令長官になられました。聯合艦隊司令長官といへば、皆さんはすぐあの日本海海戰で「皇國の興廢この一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ」といふ信號を出して、

ロシヤの艦隊を撃滅

した東郷元帥を思ひ出すでせう、皆さんがよく知つてるやうに、わが海軍でたいへん重要な地位です。いま世界の列強は眼を揃へて、日本の聯合艦隊司令長官の一擧一動を見守つてゐます。

こんな重要な役目につかれて、全國民の信頼を一身に集め、海の精鋭を率ゐて立たれた吉田司令長官の少年時代はどうでしたでせうか？中將の郷里は葉隱武士で有名な九州の佐賀で、お家は代々米屋さん、本年五十四歳ですから明治十八年の誕生です。通はれた小學校は佐賀市神野小學校で學校の成績は六年間ずうつと一番、いま佐賀市六座町の家庭には、その時貰はれた「學力優等」「品行方正」としるされた褒狀や賞狀が澤山殘つてゐます。

海の話や軍艦の物語

は子供の時から何より大好きで、暇さへあれば「トラファルガル海戰物語り」や「ネルソン傳」を熱心に讀み、中でもプルターク英雄傳が一番の愛讀書で、そのうちのテミストクレス（サラミス灣でペルシアの大海軍を全滅させた希臘の提督）の物語りは何べんも何べんも繰返して讀み、すら〱と暗誦出來るほどだつたさうです。

そのころ、日本はちやうど日清戰爭で大勝し、一躍世界に名を知られましたが、まだまだ日本海軍は西洋の國にくらべて見劣りがしてゐたので少年時代の中將の眼にはどんなにか外國の軍艦が羨ましかつたことでせう、「負けるもんか、今に見てゐろ、僕が大きくなつたら太平洋の荒波を思ふ存分に乗り切るんだ、」かう決心して、「勉強だ、勉強だ」とむちうつのでした。

こんな話もあります。ある日、中將は縁側で繪葉書をぢつと見詰めてゐましたその繪葉書はどこかの都會の風景で川のほとりを綺羅びやかな衣裳をつけた人がさも得意げにむちを鳴して馬車を乗り廻してゐました。中將は何を感じたのか鉛筆を出してその繪の横に「これは僞版だ、新版は乃公の胸中にある」と書きました。弟の藤一さんが「兄さん、それは何んの意味ですか」と尋ねますと「うん、外國の眞似はしたくない」と、一言いつたきりでした。弟の藤一さんもやつと兄さんの意味が分りうなづきました。そのころの日本は何でも外國の模倣ばかりして、中には日本人であることを忘れた人さへありました。中將は少年の心にもそれを苦々しく感じたのでせう。外國の偉い海將のことを書いた本は一心不亂に讀んでもそれは外國の偉い人に負けないための勉強で決して外國人のすべてを眞似するためではありませんでした。少年時代に早くから芽生えたこの氣性が中將の今日を築き上げたのです。【寫眞は吉田司令長官】

×　×

北の雪 赤い雪 南の雪 黒い雪

雪やこん〱、霰やこんこん、いよ〱戰場は銀世界の季節に入つてきました。わが皇軍の勇士たちも北支、江南いたるところで雪中のお正月を祝ひましたが、北支と江南では雪の性質が違つてゐます

北支戰線

ことに内蒙古や山西では九月の末から初雪を見ますが、みなカラカラに乾燥した粒の小さな粉雪で、それが零下何十度といふ身を切るやうな風に吹きまくられるため、降り積つて美しい銀世界にはならず、殘り雪はカチカチに凍つてしまひます。

江南戰線は揚子江や附近の湖沼などの水蒸氣が多いのと北支より雨も多いため、降るのは水分の多い牡丹雪で、ホト〱と落ち、比較的暖かです。

雪の深い

ことにかけてはわが國の北陸は世界の名物といつてもよい、これはシベリヤ大陸から東南へ吹き下してくる雪を含んだ季節風が日本海を渡るときに、この海から多くの水分を吸ひとり、雪の粒が大きく重くなつてゐます。そこで日本の背中をなす中部山岳を雪雲が一氣に越すことが出來ず、新潟、富山、石川、福井の各縣下にシン〱と降り積るので各縣とも積雪一丈を超えることがあります。

雪の上を歩いてゐて電柱の針金にひつかかつて危ふくころびかけたら、「この下に高田市何々町あり」と雪の上に立札さへあります。

また雪はいつも眞ッ白ときまつたわけではありません。大正二年、琵琶湖の北、越前との境の中の河内といふところで、朝起きて見ると、あたり一面銀世界ならぬ緋の世界となつてゐました。赤い雪が降つたのです。枯木の枝は一せいに

緋桃の花

が咲いたやうな美しさ！村人は大へん驚いて赤雪を掘つて見ると、上皮一寸ほど赤い皮つきの蒲鉾みたいで、夜明けから見てゐた人の話では空から降るときはたゞの白雪で、地に積ると共に急に暖かいなと思つてゐたら赤雪と化けてゐたのださうです。調べた結果は單細胞の赤い硅藻が雪の上で急に繁殖したゝめらしいのです。千八百九十二年イタリーのピアチエンザでは眞ッ黒な雪が降りました。驚いて見ると幾億とも知れぬ小さい黒い甲虫が雪の中に一ぱい入つてゐました。

大阪や北九州などの大きな工業町では薄鼠色の雪を見られます。これは空氣中の煙塵を澤山に包むためで溶かして見ると亞硫酸や硫酸が發見される毒雪です。

格言の歴史

「背水の陣」とは？

◆…漢の三傑の一人韓信が、或時僅かの兵を以て、二十萬の趙軍と決戰することになりました。味方に少しでも戰意の足りない者がゐては勝てないと見て取り、全軍河を渡して陣を布き、ひそかに二千の輕騎を間道に送つて敵の背後に出でしめ、悲壯な決意を固めて敵軍の來るのを待ちました。

◆…ところが雲霞の如く寄せて來た趙の大軍が、韓信の軍の劣勢と水を背にした陣を見て「一人殘らず捕虜にしてくれん」と嘲笑しました。

◆…ところが退却の途を自ら斷つた韓信の軍は、退いて河底の藻屑となるより進んで存分の働きをして華々しく討死する覺悟なので、決死の進撃に物凄く、その内背後に廻つた二千騎が殺到しましたので腹背に敵を受けた趙軍は、散々に討ち敗られ、却て趙將歇王が生擒にされてしまひました。

◆…これは韓信の「背水の陣」といつて有名で、これは支那で有名な兵法書たる孫子の中に「自らを死地に陷れて自ら生くるの戰法」で、我が國で言ふ「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」と同意であり、生還を期せずに戰ふわが將兵はいつもこの覺悟で進んでゐます。

參謀懸章

昔は鉛筆をさげてゐた

戰略を考へる參謀が、右肩からさげてゐる參謀懸章は何に使ふものかしつてゐますか？

あれはナポレオン一世の參謀が鉛筆（鉛筆は西暦一八〇〇年ごろフランス人コンテが發明したものです、ナポレオンが皇帝になつたのは一八〇四年でした）をなくさないやうに紐で軍服にさげたのがはじめで、だんだん紐を長くし輪にして肩にかけ、距離をはかつたり、敵を縛るのにもつかひました

日本の參謀は三本の金モールのさきに、二本のシャープペンシル型のものをさげてゐますがいまは「參謀」だといふ目じるしだけのものなので「飾緒」といひます、將官は參謀でなくても正裝か正服の時だけに金色のをつけ、宮樣の御附武官と海軍の副官は銀色のです。

照宮さまの聽召された

童話「鹽賣仁吉」〔1〕

岸邊福雄（謹述）

（さしゑ）川島はるよ

小さな家。疊が三枚ほど敷いてあります狹い古い家。敷いてあります疊も、ところどころぼろぼろ。

その狹い室に、古い琴が一つ、壁に立てかけられてありますが、ほんたうに古い琴。その糸も幾本か切れてゐるかと思はれるぐらゐの古い琴。

その家に、年の頃十一、二の男の兒が、本を膝の上に置いて、しんみりと讀み込んでゐます。靜かに靜かに讀んでゐます。

その男の兒の、すぐそばにこの兒のお母さんが、粗末な着物に、しわ〱の帶をしめて坐つてをります。髪はばら〱に亂れて頰にさへ垂れかかつてゐます。

顏はやつれ〱て、いかにも物さびしさうです。そのお母さんが、男の兒のゐる方とは違つた方を向いて

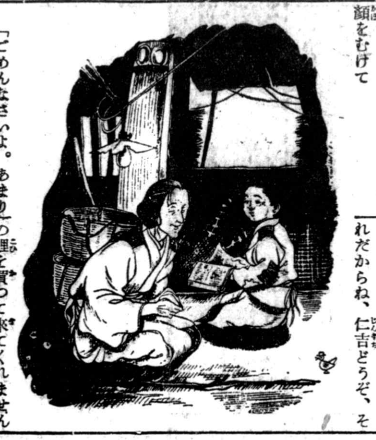
「仁や、……仁吉や」

と、大きな聲で、男の兒を呼びました。

男の兒は、靜かに本をふせてからニツコリ笑ひながらお母さんの方に顏をむけて

「お母さん、仁は、ここにゐますヨ」

と、やさしく丁寧に返事をいたしました。それを聞きましたお母さんは、仁吉の方に顏をむけて



「ごめんなさいよ。あまり靜かなもんだから、外で遊んでゐるのかと思つてなハ、、、、大きな聲を出して、ハ、、、ごめんなさい」

さういつて、しばらくしてから、一寸改まつた形で、

「仁吉や、お母さんはな、お見えないこの目を、直して戴きたいと思つて、晝も夜も、お伊勢さまを拜んでゐましたらね、ゆうべ神さまが枕頭にお立ちになつて、その目は、鯉をいただくと直る、と、かう教へて下さつたのだよ。それだからね、仁吉どうぞ、その鯉を買つて來てくれませんか。」

と、常よりも力強い聲で話されました。これを聞いた仁吉は、急にイキ〱と眼を輝かせながら、お母さんの方にくるりと向き直つて、

「まあ、本當ですか！お母さん、僕もね、お母さんの目が早く快くなるやうにと、學校へ往く時と歸る時には、いつでもお宮樣を拜んでゐたんですよ。嬉しいなあ。……その神樣は、そんなに教へて下さつたんですか、……ほんたうだ！……お母さん、鯉を買つて來ませう。……これから行つて、直ぐ買つて來ませう」

と、勇み切つた返事です、お母さんは、

「よく請合つてくれました有りがたう有がたう、でも、仁は、鯉を買ふお金を持つてゐますかエ」

仁吉は、どうして左樣な澤山のお金を持ちませうぞ。お母さんのその問ひには仁吉も

「お母さんもお金を持つてゐないんですか」

と、問ひ返しましたが、二人とも一錢のお金を持たないさびしさに、今までの希望もどこへやら、だまつて下を向いたまゝ、涙ぐんでしまひました。……あゝほしいなあお金が……とお母さんも仁吉も思ひは、それ一つでした。

御挨拶に代へて

明けまして御目出たう。

みなさんに永らく御愛讀を賜つたコドモのページはけふ新年を期して「日伯コドモ新聞」と改め、みなさんの御手許に見えることになりました。今更申上げるまでもなく、本紙は皆さんの新聞として今後いろ〱と勉強のため大いに役に立つてゆくつもりです。どうぞよろしく……。

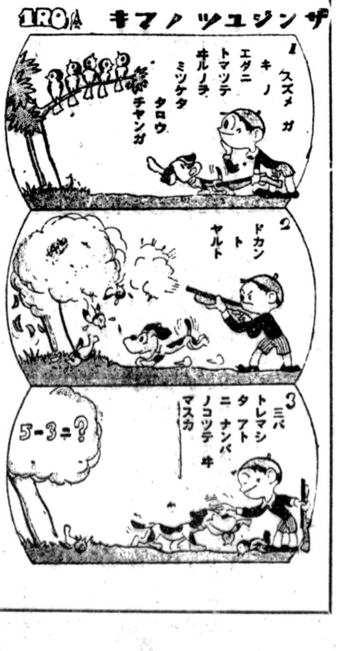
尚本紙は第一號から丁寧に切りとつて誰でもが讀まれるやうに保存して置いて下さい。將來きつと皆さんは驚く程立振な知識を得ることを信じます

カタカナらん

ウミ カラ キン ノ ボウ

キヨネン ノ 七月 二十七日 ノ バン デシタ。オキナハケン ノ レフシタチ ガ、「ミナトグチ ノ ウミ ノ ソコ デ、キン ノ ボウ ヲ ミツケマシタ。」ト、ハバ 十五センチ、ナガサ 六十センチ、オモテ ニ カンジデ「金」（キン）ト ホリツケタ、オモタイ ボウ ヲ キールン ノ ケイサツ ニ トドケ マシタ。モシ モ、ホンタウ ニ キン ノ ノベボウ デ アルト、三十マンエン モ スル サウ デス。

シカシ、「オホムカシ ニ ツクツタ、ドウ ノ イモノ デ、カイゾク ガ ウミ ニ ナゲコンダ モノ デ アラウ。」トモ イハレテ キマス。サア、ドチラ ガ ホンタウ デセウ。


ザンジユツノ マキ
1RO
1
スズメ ガ キノ エダニ トマツテ ヰルノヲ ミツケタ タロウ チヤンガ
2
ドカン ト ヤルト
3
三バ トレマシタ アト ニ ナンバ ノコツテ ヰマスカ
5-3=?

知識の泉

國際電話は普通電話とちがひ、パーソン、コールといふ申込方があります。例へばニューヨーク〇〇ホテル二五九七番大阪一郎氏と人名を指定して申し込む方法です。この場合先方の電話番號の不明の時は、ニューヨーク〇〇ホテル大阪一郎氏と宿所をいへば、外國の電話局で番號を探してつないでくれます。もし相手の人が不在の場合はその行先を搜して接續するか、又は歸宅の時刻がわかる場合は更にその時刻に接續してくれます。それから料金の計算法は、國際電話では雙方の本人が會話を始めた時から計算します。だから、先方の取次人が電話口に出て居る間は計算されません。

提燈行列

進元恒夫

大小の提燈が、
闇の中に赤々と
つゞく。
人のさわぐ聲、
進軍の歌も
入りまじつて
勇ましい。

○○笑話○○　心配無用

――今日、僕のお父さん、三十尺の梯子から落ちたんだよ。

――怪我しなかつた？

――かすり傷一つ負はなかつたよ。

――運がよかつたんだね

――さうだよ、三十尺の梯子の一番下の段から落ちたんだもの！

童話

風の中の子供

坪田譲治

（27）

お母さんと鶏飼のをばさんはまだ座敷で話してゐた。三平は善太に柿の木の下で鶏飼の家の話をしてゐた。その内三平は立ち上つた。

「あ、さうだあ。」

何かを思ひ出したらしい。彼は玄關へ行つた。そこで下駄箱を開た。

「何だい？」

ついて來た善太が聞く。

「ウン。」

三平は下駄箱の中を覗くとこんどは緣側を廻つて、勝手口へ行く。

「何だい、三平チャンの靴？」

「ウウン。」

彼はカブリを振るのであるしかし何かをさがしてゐるらしい。

「何だい。いへよう。兄チャンがさがしてやるよ。」

彼はいはない。勝手口を見廻すと、默つて柿の木の下に來て、また石油箱に腰をかけた。そのまま默つてしまつたしばらく經つて善太が靜かに訊いた。

「ね、運動靴だらう。」

「ウウン。」

やはりカブリを振る。

「何だらうなあ。」

善太は首を傾ける。

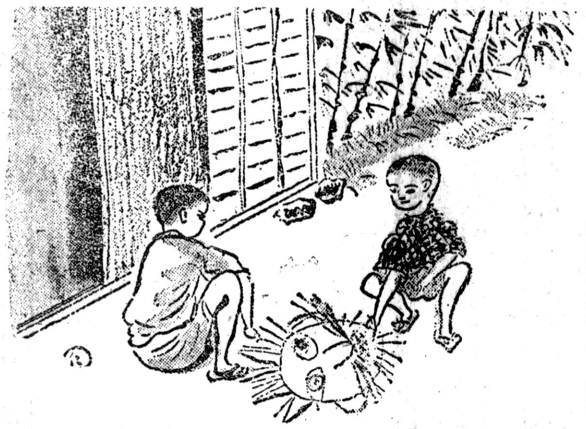
「兄チャン。」

「何だい。」

しかし三平は何もいはない

「いつたい、何なんだい。分んないぢやないか。」

じれる善太の顔をぢつと見つめて、それから靜かに三平が訊いた。



「兄チャン、お父さんは？」

三平はお父さんが警察へ行く時はいて出た下駄が返つてゐるかと、今までさがしてゐたのである。一番に聞きたい父の消息を誰も教へてくれなかつた。訊いて見ることも出來なかつた。今、初めてきくのである。善太は返事をしなかつた。うつ向いて下の土を見つめ、やがて唇を嚙みしめた。眼から涙が出さうになつて來た。これを見ると、三平は何氣なく立ち上り、やはりさがし物でもするやうに物置の方へ歩いて行つた。物置の蔭に入ると、木片を拾つてしやがみ込み、土の上に樂書を始めた。樂書は始めたが、彼の吸ふ息吐く息はフフと震へて來た。涙が頰を傳つて流れ始めた。何をかいてるか分らない。それでも彼はかきつづけた。大きな丸をかいて、その中に目鼻をつける。耳も兩脇に描けば、鼻の下にピンと長いヒゲさへはね上げる。その間にも、彼は木片持つ手の甲で傳ふ涙をぬぐふのである。ヒゲが出來上つた時、彼は木片をポロリと落し、兩手で顔をおほうてむせび入つた

暫らくすると、善太がやつて來た。彼も顔をぬりくりにしてゐる。三平もぬりくりの顔である。しかし今は立派に泣くのをやめ、樂書を見つめてゐる。大威張りでいふことが出來る。

「兄チャン、こんなお化けが出て來たらどうする？」

ヒゲの大顔をさしていふのである。

「そんなお化けなんか出ないよ。」

「もし出たらさ、どうする？」

「出ないよ。」

「出なくつてもさ、もし出たらつて、いふんだよ。」

「出ないんだもの。出たらなんてことないよ。」

「さうかなあ。ボク、こんなの出たつてさ、ちつとも恐くないと思ふよ。」

「さうさあ。」

「ぢや、こんなのが出て來たら？」

三平は卽座に、その大顔の頭に二本の角をくつゝけた。口の上下にギザギザの無數の齒を描きつけた。

「恐くないや。」

「ぢや、こんなのは？」

彼は角を四本にふやしたのである。

自習室

尋三

【讀方】

次の○の中に適當な文字を入れて下さい。

(イ)學校では○○○○のことうちでもよく勉強します。

(ロ)一通りではとても勝てない。○○○○○にする外はない。

尋四

【讀方】

次のことばのわけをお書きなさい。

(イ)　ひそかに

(ロ)　不意を討たれる

(ハ)　うづまる

(ニ)　命から〴〵

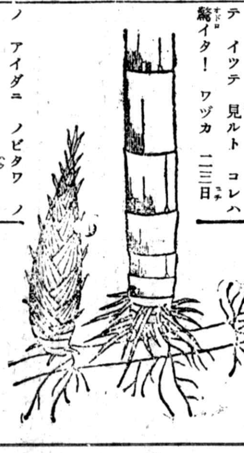
母とコドモの讀本

タケノコノオ話

太郎サンハ　二三日前　學校カラ　カヘリニ　ウラノ　オ山ヲ　通リマシタ。ソトノ　竹ヤブノ　タケノコガ　頭ヲ　ツキダシテ　ヰルノヲ　見ツケマシタ。今日ハ　スコシ　ノビタ　ダラウト　思ツテ　イツテ　見ルト　コレハ　驚イタ！　ワヅカ　二三日ノ　アイダニ　ノビタワ　ノビタワ　アツチノ　方デモ　コツチノ　方デモ　ニヨキ　ニヨキ　ニヨキ　ニヨキト　筍ガ　デテ　キマス。

太郎サンハ　オ家ヘ　カヘツテ　筍ノ　ノビタ　コトヲ　オ父サンヤ　オ母サンニ　話シマシタ。ソシテ　オ父サンカラ　次ノヤウナ　竹ノ　オ話ヲ　キカシテ　モラヒマシタ。

竹ノ　莖ハ　タクサンノ　節カラ　デキテ　キテ　ソノ中ハ　カラツポデス。ダカラ　風ニ　アツテモ　オレル　コトハ　アリマセン。ソシテ　コノ節カラ　タガヒ　チガヒニ　枝ヲ　ダシマス。幹ヲ　キツテ　見ルト　竹ノ　莖ニハ



タクサンノ　スヂガ　アリマス。

次ニ　竹ニハ　地下莖ト　イツテ　地ノ　下ヘ　カラダヲ　ノバシテ　キマス。ソレハ　チヨツト　根ノ　ヤウニ　見エル　ケレドモ　根デハ　アリマセン。コノ　地下莖ト　イフ　地ノ下ノ莖カラ　春　筍ガ　生レテ　クルノデス。

竹ニハ　メツタニ　花ガ　咲キマセンガ　タマニハ　四十年モ　五十年モ　タツテカラ　咲ク　コトモ　アリマス　モシ　竹ニ　メヅラシク　花ガ　咲クトキハ　ソノ竹ノ　枯レル　トキナノデス。」

□ボク　ノ　シンブン

□アタシ　ノ　シンブン

算術

《尋　二》

オ客サマ　ガ　四人　ヰマス。オ菓子ヲ　サシアゲマシタ。オ菓子　ハ　一皿　ニ　五ツ　ヅツ　モツテ　アリマス。ミンナ　デ　イクツ　ニ　ナルデセウ。

《尋　三》

ヘヤ　ノ　天ジヤウ　ノ　高サヲ　ハカラウ　ト　思ツテ　竹　ヲ　モツテ來マシタ。竹ノ長サガ一米五十八糎アリマシタ。ソレヲ　柱　ニ　アテテ　天ジヤウ　ニ　トドカセ　竹ノ　下ノハシ　カラ　ユカマデ　ヲ　ハカツテミマスト　八十七糎アリマシタ。天ジヤウ　ノ　高サハ　ドレダケ　アルデセウカ。

《尋　四》

正雄君ノ　算術ノ　セイセキシラベガ五度アツテ　ソノ點數ハ九點　七點　十點　八點　九點デアリマシタ。平均スルト　何點何分ニナルデセウカ。

《尋　五》

山ノボリヲスルトキ　途中ノ茶屋デ休ミマシタ。ソコニ休ンデキタ學生ガ「ココマデガ全體ノ$\frac{2}{3}$デ　フモトカラ5$\frac{2}{3}$km.歩イタワケダヨ」ト話シテキマシタ。フモト　カラ　コノ山ノ頂上マデノ　道ノリハ　ドレダケ　アルデセウカ。